



「いじめ」に思う

—ふと思い出した手話から—

吉成 タダシ (徳島県徳島市立中学校)



手話の「7」で半円を描くと

グーの状態に手を握り、親指を立てると、それは数字の「5」を示す手話になる。「I'll be back」まるで、ハリウッド映画のワンシーンだ。

さらに、たたんでいた人さし指を伸ばすと、鉄砲のような状態になるが、それで数字の「6」を示す手話になる。

さらにさらに、中指まで伸ばすと、数字の「7」を示す手話となる。さらにさらにさらに、その手の体の前で半円を描くと……?

十数年経つても同じ感情が

先日、車に乗っていると、カーラジオから、ある曲のイントロが流れてきた。

『どこかで聞いたことのあるような……』

その耳に馴染んだメロディを聞き進めていくと、不思議と自然に、手話が出てきた。はて……?

『そういうえば昔、手話コーラスをやったことが!』

もう十数年も前に、中学校の文化祭で、手話クラブとしてやったことのある曲だった。不思議なものだ。十数年も前に覚えた手話なのに、メロディとともに、スラスラと出てくる。当時、地元の手話サークルに通っていたとき、中学生が「やりたい!」と言った曲に、

「ろうあ者」の方が教えてくださった手話だった。

さらに聞き進めながら手話をしていたとき、ある歌詞にふと小さな感動を覚え、手が止まった。数字の「7」を体の前で半円に描く……それは、「虹」という手話になる。赤橙黄緑青蘭紫、7色を、空にアーチを描くように動作するからだ。

『なんてステキな手話!』

きつと、あのときだつて同じ思いを持ったはずだ。でも、十数年経った今もなお、同じ感情を抱くことができる。

『誰が考えたんだろう……?』

それが、「ろうあ者」であろうとなかろうと、そう表そうとした感性に、そして手話のなかに秘められた英知に、人間の持つ美しい本質を感じる事ができる。

情報伝達手段は発展しても

阪神淡路大震災のとき、情報不足は、障がいのある方々に特に深刻な打撃を与えた。そのころよりも情報伝達手段は発達したはずであるが、それでも東日本大震災では、またしても、障がいのある方や子どもたち、そしてお年寄りなどの社会的弱者を容赦なく襲った。

昨今の携帯電話やスマートホンの普及により、「ろうあ者」の情報伝達量は格段に増えた。それまで情報を得るのも難しければ、発信

することもままならなかったことを思えば、どれだけ生活の幅が広がったことか。

しかし、その一方で、「電気がなければ……」「瞬時に伝達が必要なきは……」といったリスクは常に抱えたままであることに変わりはないのだ。

少数派が持つ文化を見つめるなかで

「ろうあ者」も、手話にしても、やはり少数派である。いじめは、少数派の少数であるという点や違いを取り上げることで成立する。

決して多数派に向けられることはない。いくら機器が発達しようとしても、そこに「少数派を大切にしろ」という視点がなければ、単なるツールに過ぎない。ツールが使える者は自己責任で助かったとされ、使えない者はやはり自己責任の名の下に、少数派として排除され、切り捨てられていく。つまり、少数派はどこまでも限りなく、そこに居るのに、「居ない」存在として、空気にように扱われていくのである。大切にしたいことは、少数派が持つ文化をじっくりと見つめるなかで、そこに息づく、本来持っている人間の美しい本質を感じることでないかと思う。それを感じることが、すべての始まりでないかと思う。それさえ感じることができれば、

決してその対象を排除したり、蔑んだり、ましてやいじめたりすることはないのであると思う。

所詮人間はアナログである。いくらデジタルな文化が発達しても、そのこと自体に変わりはないはずなのだから、興味を持つべきは、やはり生身の人間なのである。まずは、多様な、生身の人間と出会っていくことではないかと思う。デジタルな象徴であるはずの、あのターミネーターですら、「I'll be back」と言えたのだから。

「伝えよう、分かって」という気持ち

手話は、その対象物の本質を捉えつつ、明瞭・簡潔に表すといった素晴らしい特性を持っている。そこには、人間が持っている知恵と工夫が満載されていると言つてよい。それでも、もし会話が通じなければ、思い出してやればよい。生身の人間同士、「伝えよう」「分かるう」という、原始的な人間の感情を。

その晩、中3になる我が子に「7」の手話を教えた後、「この手話、何だと思う?」とアーチを描いてみた。

ニンマリとした表情でしばらく考えたあと、「虹!」。ポンッと飛び出した声に、満面の笑顔がはじけた。